



海拔0メートル

写真：特派員G

ベニスに溺死ス

デキッ

ゴンドラ浮いたら 軍艦泊まったら。 地球は熱い惑星！



第6巻第5号
通巻第65号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社
からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせ E-mail : colors@go-karasu.com

今日の紙面から

- 一画(ソート画)
マンヒボの海は広いな大きいな
- 二画(からすライブラリー)
CD『シブ』
本『吾輩は猫である』
- 四面(建築画)
ペニス
- 五面(帰化動物画)
2010年エヒカニ絶滅



五月にもなると蝶が飛び交う姿を頻りに目にするようになる。玄関を出て、近所を一巡り。今年はキチヨウやアゲハの類いが少なく、もっぱらスジグロやモンシロが主流である。この狭い団地という環境の中でも、年によって幅を利かせている種類が異なるのは不思議なことだ。定期的に入れ替わるのでもないようだし、蝶だけに限ったことでもないようだ。蝉の世界でも同様のことが起こっているように思われる。食草が大幅に増減したなどという可能性は考えにくく、原因はとんとわからない。そんなことを漠然と考えながら、蝶の舞、艶やかな姿を目で追う季節。

ぼんやり眺めていて楽しいのは蝶ばかりではない。鳥たちだつてなかなかのもの。高く合低く、低く高く、あるいは、高く高く。あるものはなめらかに滑るように、あるものはじたばたと喘ぐように。

ぼんやりとかなり高いところを鴨が番で飛ぶ空を見上げていると、いつの間にか我が家でぶ猫がすぐそこまでやってきている。私の顔を見て、にやあにやあ。しかしながら、相変わらず、彼女の言葉は私には理解できない。にやあにやあ騒いでいれば、たいていは腹が減っている、という意味だということ

とが経験上わかっているけれど、先方の目的がそれ以外の場合、意志を読み取ることは非常に難しい。今の場合、何を言おうとしているのだろう。俺様の縄張りで何してやがるんだ、なのか。おまえみたいなどんくさいのがうるうるしていると獲物が逃げちまうだろうが、なのか。おい、あの鳥捕まえるの手伝えよ、なのか。それとも、いつも通りに、腹が減った、なのか。

理解しようとして一瞬懸命に彼女の表情や仕草を見に眺める私。彼女は彼女で何事かを伝えんとにやあにやあ鳴き喚ぎ、時には、私の足先をばふつと齧ってみたり。しかしながら、どんなに頑張ってみても、わからないときにはわからないもので、私は途方に暮れるだけ。先方は不貞腐れてどこかへ去ってゆく。

かのでぶ猫と理解し合う必要がどれほどあるのかというと、実のところ、それほどのことではない。お互いに何となく不満な気分が残るという程度で、だから何がどうなる、というわけではないのだ。それでも、言葉が通じればなあ、と思わなくもない。それぞれ、言葉が通じればどんなに便利だろう、と

(最終面に続く)

からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。



ヤンヒポの海は 広いな大きいな

二十歳を少し過ぎた頃インドネシアはバリ島に出掛けた事がある。その後、何度も行く事になるのだが、その第一回目的事。当然一人旅なはずはなく、しかも同伴者のご招待というありがたいシチュエーション。

バリ島はインドネシアにあるリゾートで、日本人にも人気が高い。うる覚えだが、インドネシア自体はイスラム教徒の割合が多いはずだが、バリ島に関してはバリ・ヒンズーというヒンズー教徒が大半を占めている。島には、日本でも有名な、ケチャック・ダンスを初めとするパワフルな民族舞踊が沢山あり一見の価値がある。また、日本からの渡航者が多い為、島民は片言の日本語を上手く使い分ける。彼らは日本人を見ると、シャチョー、シャチョー」と声をかけ、なんとか土産物売りつけようとする。その中には、今ではもう廃れたかもしれないが、幻覚作用のあるキノコ「マジックマッシュ」なども含まれており、日本人サーファーの人気を集めていた。しかしながらい物も多く、良質なキノコを入手する

にはそれなりの知識とコネが必要だったりもするのだ。

リゾートアイランドであるから、ビーチでのレクリエーションも充実している。砂浜に生息しているのが「ジャワニーズ」と言われるジャワ島からの出稼ぎ労働者だ。バリの内陸で店舗を構え販売している「バリニーズ」に対して、ビーチに陣取り自分の持ち物、例えばサーフボードを観光客に貸し出したり、オイルマツサーやドレッドヘアを編んだりして生計を立てている。概して、このバリニーズとジャワニーズは敵対関係にあり、夜になると繁華街で乱闘している現場を多々見かけたものだ。少し前に大きな爆弾テロ事件も有ったので記憶にも新しいはずだ。

では話しをヤンヒポに戻そう。バリ島に初上陸となった件の旅行だが、仕切りは全て同伴者に任せていた。同伴者がスポンサーなのでから当たり前といえはその通りなのだ。が・・・。同伴者が押さえたホテルは、ブルタミナ・コテージというバリでも五つ星の高級ホテルで、部屋は全て敷地内のコテージとして独立しており、入り江になっているプライベートビーチ(宿泊者意外の者が立ち入り出来ないビーチ)を備えていた。またバリ島唯一の空港、デンパサル空港に隣接しており、プライベートビーチからジャンボ旅客機の着陸が間近で見物出来るオマケ付きだった。

滞在は約一週間だったが、その間の大半をホテル敷地内で過ごしていた。プライベートビーチは遠浅で、海水ではあるがクリスタルクリアと言うに相応しい程の透明度を誇っている。浜からかなり離れても海底にすぐ手の届きそうなくらい近くに見える。実際は三メートルを越えていたりするのだが・・・。だからシュノーケリングなども大いに楽し

め、陸上では味わえない別世界を簡単に体験出来たのだ。他のレクリエーションとしては、パラシュートを付けた体をモーターボートで引いてもらい、空の散歩を楽しむバラ・セーリングやジェット・スキーを楽しむ事も出来た。

さて、そのジェット・スキーだが、一般的に「KAWASAKI」と言われる立ったままコントロールする運動性能の高いタイプと「YAMAHHA」最近ではマリンジェットと呼ばれているらしいと言われるオートバイに近い形で乗る二つのタイプがある。同伴者と二人乗りが出来るのは後者の「YAMAHHA」タイプなので、こちらをプライベートビーチ内で借りて乗り回す事にした。

天気は快晴、入り江内には他人の姿を見当たらず、入り江の脇にはジャンボ・ジェットが優雅に着陸を続けている。先にも書いた通り、クリスタルクリアな海水で、今にも海底に手が届きそうな程美しい入り江。思う存分海面を疾走する。借りる際、ライフベストは必要かと聞かれたがこの爽快な気分には余計なものは要らない。係員はいかにも現地の小僧といった風情なので細かい事も言わず全く問題無かった。



YAMAHHA TYPE



KAWASAKI TYPE

「YAMAHHA」の操作はいたって簡単。オートバイのようにまたがり、アクセルは右手にレバーが付いていて親指で操作する。ハンドルを右に切れば右に曲がり、少し重心を内側に倒してやればスムーズに曲がってくれる。しかし、自分の知識には、万が一落車した際エンジンが切れるよう手首にキルスイッチへ繋がったワイヤーを着けるはずのだが、これには付いていないようだ。しかし「KAWASAKI」タイプならまだしも

「YAMAHYA」ではそのよう転覆するような事も
あり得ないので問題無さそう。最初のうちは
様子をしながらの運転だったが、慣れてく
ると常にフルスロットル状態。曲がるのも無
理やり内側に寝かせてカウンターを当てなが
ら海面を滑っていく。気分は完全にGPレ
ーサーだ。タンDEM(二人乗り)している事自体
ほとんど忘れていた。しかし、同乗者もかな
りエキサイトしているようなので、楽しめて
いたのだろう。

そう思った刹那、横滑りしていた先で小さ
い波間に側面からぶつかり、真横向きに急ブ
レーキがかかった状態になった。その瞬間、
二人とも海に投げ出されていた。海へ落ちる
瞬間、同乗者が全くのカナヅチである事や、
ライフベストを着けていない事、水深一メー
トルぐらいにしか見えないが実は三メートル
近くある事が脳内へいつぱんに押し寄せた。
大体五メートルぐらい飛ばされたらどうか。
当然、ヒューマニストなヤンヒボは同乗者を
探す。すると、取りあえず驚いてはいるもの
の、懸命に浮いていると頑張っている。し
かし、長くはもたないだろう。浜までの距離
は人間がタバコのフィルターぐらいのサイズ
にしか見えない程度。当然、何が起ったか
全く気がついていない。

さて、ジェットスキーはというと、大体十
メートルぐらい先にある。やはりこは、
とつとつとジェットスキーを捕まえて、早いと
こ同伴者を救出した方が良さそう。元々泳
ぎには自信のあるヤンヒボは約十メートル先
のジェットスキーに向かって全力で泳ぎ出し
た。幸い抜群の透明度なので泳ぎながらも
ジェットスキーの位置はよく見える。しか
も、エンジンがアイドリング状態にも関わら
ず、前進しているのを見えている。その時、
また脳内物質が吹き出した。普通、ジェット
スキーは落車した際、エンジンが止まるか、

半径五メートルぐらいの円を描くように自走
するはずなのだ。しかし、こいつは真つすく
我々から遠ざかっていく。言いようのない驚
き、しかも、すぐ目の前で見えているにも関
わらずだ。しこの言ってる暇は無く、兎に
角、全力で追いかけた。早くしないと同伴者
は沈没するだろう。たとえそうなたとして
も見つけるのは容易いはずなのだ。

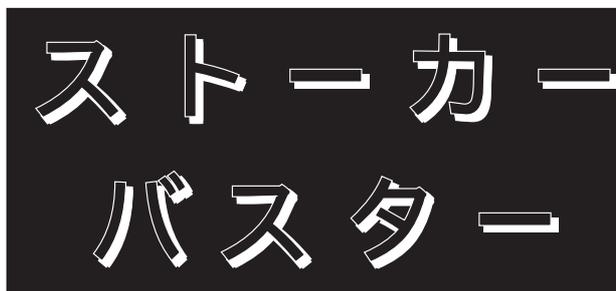
大体三十メートルぐらい全速力で泳いだら
らうか。それも沖に向かう方向で。そろそろ
息が切れそう。だが、随分近づいた。後一
泳ぎで手が届きそう。そして手を伸ばした
瞬間、手の平からジェットスキーの感触がす
るりと抜け落ちた。捕まえ損ねたのだ。もう
一かきする力は残っていない。ただ浮いてい
るだけが精いっぱい。波に阻まれ同伴者も見
えなくなっている。空を見上げると日本では
考えられない程の青空が広がっている。ちょ
うどその時、ガルダインドネシア航空の
ジャンボ・ジェットが優雅に滑走路へ進入し
てきた。「あんなに大きな機体が何故、浮くん
だろう」とバリの海に散るのか。思っただ
り冷静だった。

さすがに浜で見ていた係員が異変に気づ
き、慌ててジェットスキーを発進させたのが
見えた。彼らが到着するぐらいまでは浮いて
居られるだろう。しかし、明らかに自分の方
には向かっていない。まずはジェットスキー
を回収に行き、同伴者を救助した後、最後に
ヤンヒボの所に来た。同伴者も頑張っ
ていたようだ。しかし、こんな事ぐらいで二
人の関係が悪くなるような事は無かつ
た.....

次回は、前回の続きでも思い出したら回想
してみようと思つ。

あなたの子どもは大丈夫？

あなたの平穏な生活を
脅かすストーカーを本
場米国で培った最新の
技術と装備を駆使して
退治します。
あなた一人で悩まない
でください。



相談無料
秘密厳守
防犯用品販売・
防犯対策指導も
致します。

produced by
P.D.Agency

tora@pda.co.jp
1843 N. Cherokee AVE: APT. #216
Los Angeles: CA 90028, USA
voice : +1-310-493-1001
facsimile : +1-323-466-5645



「FANS ONLY」

Belle and Sebastian

ole-587, 2004年, Matador Records

わたしはここ数日原因不明の吐気や腹痛に悩まされている。大袈裟だと思われるかもしれないが、このままこの痛みから抜け出せず死んでしまうのではないだろうかとかかなりネガティブになったりもする。天罰でも下ったかと思いたくなるその状態の中で、少しでも気分を良くせねばとかけるのが最近では専らベルアンドセバスチャンだ。処方箋かよ、つて、ああそうだよ。彼らの音に魅かれる理由の一つは、押しつけがましくないところだ。他人は他人、自分は自分。彼らとしたら、自分たちのやりたいことをやっているだけで他人との敷居を越えようなんて意識はちつともないのに、いつのまにか他人を虜にさせてしまう。まるで猫の野良猫バンドがDVDを出した。内容は、プロモーションビデオとはいえないレベルの映像(からセッションの風景、各国でのフェス、彼ら主催のフェスまで、彼らの辿ってきたフラグメンツがぎゅっと一枚に纏まったものなのだが、これがまた実に素敵。夕暮れ時のステージがやけに似合ったり、ブラジル人の大歓声のなかご満悦になったり、子供のように飛び跳ねて熱唱する「THE KIDS ARE ALRIGHT」、イギリス映画でいかにも見慣れているようなグラスゴーの街。どのシーンを観ても実は、私にやけるばかり。しかし、私がどんなに彼らを好きだと言ったところで、彼らには全く関係のないことなのだ。それはもう完全な片思いなわけ。さらに、私がどんなにこのDVDに感動をしても、タイトルからもわかるようにベルセバに何の興味もない人は何の幸せも得られないだろう。笑い一つも難しい。でも、もしも琴線に触れられているのであれば、きつと虜になってしまうはずだ。この猫の虜に。

(と)





YAMAZAKI MASAYOSHI
「SHEEP」



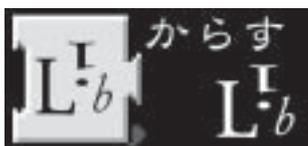
あまり音楽CDを買わない私が、学生の頃からなぜかついつい買ってしまう。そんな気にさせるのは、山

崎まさよしの曲だ。彼の人となりもおもしろいのだが、兎に角ギターを弾かせたら、聴入って見入ってしまう。いつかまさよしのようにギターを弾けるようになりたい、と冗談めかして言ったことがあるが、少し音楽をかじっている友人にムリだよ、と言われた。それほど難しいコードで演奏しているらしい。

彼の曲は大抵聞いてきたが、その中でも、あとからじわじわとまた聴きたくなるような曲があったのがこの「SHEEP」である。すべての曲の作曲、作詞、演奏、編集を一人でこなしたという。彼の独自のアコースティックな歌声と幅の広い演奏を堪能できるアルバムである。

ドラマや映画に出演したり、いろんなTV番組やCMで彼の曲が流れているにも関わらず、不思議なことに、メジャーなように聞いていまいち認知されていないところがある。カラオケでセロリを歌っても、SMAPやスネ、なんて言われる始末である。しかし、天の邪鬼の私にとってはそこら辺も含めて山崎の魅力なのだ。ただ、山崎まさよしを知らない人が「SHEEP」を聴くと眠くなってしまつかもれない。収録された、聞き惚れるはずの「PASSAGE」やわらかい月夜では眠気に襲われ、最後の「灯りを消す前」に至っては灯も消さずに寝てしまっているかもしれない。山崎のメジャーヒットした他の曲を聴いて、ちょっと彼が好きになってきた人におすすめのアルバムである。

(高橋)



『吾輩は猫である』

夏目漱石

岩波書店、一九九〇年、ISBN 4000990011

漱石が好きか、と問われれば、そりゃ好きさ、と答える。けれども、それほど好きだろつか、と自問すると、そうでもないかな、という気がするのも事実。そうなんだけれど、気がつく、忘れた頃に手に取って、ぱらぱらと頁を繰っている自分がある。やっぱり、漱石が好きなのか、私は。

今回は百鬼園先生の贋作を読んだついでに、本家にちよこつと寄り道してみた次第。このついでに、今度は漱石の猫をモデルにした蔭絵萬年筆が実現したりして……おっと、これはまだ企業秘密なのであった。

自分の中で、どれほどの存在なのかということが判然としなくなるほど、当たり前のようにそこに在る漱石。あれっと思つて振り返ってみると、いつもそこに漱石がいる。教科書にも本棚にも、ほくたちの心の中にも。好きなのか好きじゃないのか。嬉しいのか嬉しくないのか。そんなことはどうでも良い、というほどだ。

(全木)





ベニスのサンマルコ広場は水びたし。年間250回水没する。名物のゴンドラが同じ高さに浮かぶ。その向こうには、イタリア海軍の軍艦が控える。カルロ・スカルパ、イタリア近代の建築家がベニスに残したオリヴェッティのショールームと大学の門。地元産の大理石を使った精巧なデザイン。バルセロナの新しい市場。エンリック・ミラージェスの creation。地元の家具工場で、職人と鏡のエッジの詳細を検討する現代の建築家 I 氏。 **creation** !



二〇一〇年エビカニ絶滅

〜アメリカザリガニしらべ〜

年に一度の動物しらべシリーズ。ニホンイタチ、ハクビシンと続けたが、そのどちらもが、自らの意志とは無関係に人間によって連れてこられたいわゆる「帰化動物」であった。江戸時代、「駿河浮気調査」に効用ありと目干しにされた中国原産のニホンヤモリ。SARS騒動でまだ記憶に新しいハクビシンは、明治のころ毛皮やペット用として輸入された。そして今年。ある知り合いが家族で千葉まで出掛けて、体験田植えなるものに参加してみたら、「カエルもミミズもいなくて良かったあ。何でも薬でいらないようにしてるんだって」なのだそう。収穫した米はもらえることになってる「っていうんだけど、いいですか、偽物の土からは偽物しか獲れませんよ。

我が家を含めてふつうの百姓は、そんな百書あって一利ない無駄な作業は夢にも発想しない。だから両者とも健在だし、ひいるんべえ(ヒル)も生き血を求めてそこら中のたくりまわる。でも、ザリガニは最近ほめつきり姿を見なくなった。まあ、田んぼの中で見かけることはほとんどなかったけど、水路にはアメリカザリガニとかいたよなあ・・・。(望月)

日本上陸

神奈川県鎌倉市のある広場の一角に、「アメリカザリガニの故郷」と書かれた立て札が立っている。昭和2(1927)年、この地に初めてアメリカザリガニが持ち込まれたことを記念して、鎌倉市が立てたものだ。

史上初の日本行きザリガニ二百匹が積み込まれたのは、ミシシッピ川河口に位置するニューオーリンズの港。横浜までの船旅の間に80匹は死んでしまったが、生き残った20匹が、在日アメリカザリガニの祖となる栄養を担うことになった。

輸入したのは、鎌倉は大船の辺りで食用ガエルの養殖場を営んでいた河野卯三郎。当初の用途はウシガエリ(食用ガエル)の工サであった。

世にも珍しいエビカニ

当時から大雨による洪水などが起きると、養殖場から逃げ出すものがあったが、彼らは周囲の水田や川に住み着くだけだった。それがやがて

養殖場が閉鎖され、養殖池が取り壊されると完全に野放しに。現在、アメリカザリガニの分布は、北は青森、南は鹿児島まで北海道と沖縄をのぞく全国におよぶ。移動能力も限られ、そもそも淡水の住人である彼らが、どうして海を渡って九州や四国にまでも住み着くようになったのだろうか。

もちろん、手を貸したのは人間。特に子供たちだった。

「エビカニ」。アメリカザリガニは当時はそう呼ばれて、食用ではなく、家で飼うものとして子供たちの人気を得ていた。夜店や縁日などでは、「エビとカニ」の合の子の、世にも珍しい動物などと銘打たれて盛んに売られていたのだった。これを買った人が全国各地に持ち帰り、そつやって運ばれていったものが、ほどなく捨てられ、あるいはスキをみて水槽から脱け出したのである。

なぜアメリカザリガニが生き延びた?

現在、日本には4種類のザリガニが生息して



いる。うち日本原産はニホンザリガニのみ。水が冷たくて清らかな山間の溪流を好む彼らは、そもそも平野には少なく、その分布は北海道と東北地方の一部に限られている。

あとの3種類は、アメリカザリガニを含めて、すべてアメリカから持ち込まれたものだ。残りはタンカイザリガニと、これによく似たウチダザリガニ。いずれもカエルではなく、人間の食用として山岳地帯のオレゴン州から輸入されたが、飼育に失敗。夏には水温が高くなる日本の環境に適応できなかったためだ。今は、滋賀県と北海道の一部に細々と生き残るだけとなっている。(ただし近年、ウチダは、伊勢エビ級の味を買われてフランス料理の高級食材として見

直されているらしい) アメリカザリガニが日本で繁栄できたのは、おおまかに言って3つの理由が挙げられる。ひとつは、近くによく似た競争相手がいなかったこと。すでに述べたように、ニホンザリガニとは、完全に棲み分けが成立している。

そして、日本の環境が原産地とよく似ていたこと。原産地は、ミシシッピ川流域を中心としたアメリカ南東部の広大な湿地帯。このアシなどの植物が生える水深の浅い池や沼は、ちょうど泥底にイネが生える水田と非常に環境が似ているのだ。気候も同じ温帯に属する日本の水田の周辺は、彼らにとって絶好の棲み処であり、しかも水田は日本全国いたるところにある。

さらに、彼らの手強い繁殖戦略も見逃せない。産卵数は二〇〇〜三〇〇個。その数は、他の水生動物と比べてみても決して多くはない。だが他と違うのは、そのほとんどすべてが完全に育つところ。産卵直後の卵は透明な粘液に包まれており、一日たつと、粘液は糸になって母親の腹部の足に卵をしつかりと付着させる。これにより、卵がどこかへ流れていつてしまつようなことはまずない。また、幼生の変態はすべて卵殻の中で行われる。母親にくっついたまま、ほとんど成体の形態にまで育ち、その後には孵化するのである。

生まれたばかりの子供も、小さいうちは母親の腹部の足にハサミでぶら下がって過ごす。さらに独立してからもしばらくは、危険にあったとき、母親の元に戻ってこられる範囲を越えて行かない。ここまでやれば、脱落者が出ないはずだ。

駆除せよ!

戦中から戦後の昭和二〇年代にかけて、日本各地に急激にその勢力範囲を広げていったアメリカザリガニたち。気候風土の面で申し分ない日本での暮らしは、なかなか快適であったに

違いない。でも、もちろんそんな平穩な暮らしが長続きするわけがない。

新しく棲み着いた場所で、彼らはまず、水生昆虫やヒルなどを食べるので、農民たちからは、ひとまずの歓迎を受ける。だが、稲の苗を食いちぎり、あぜにトンネルをつくって水漏れを起こしたりするので、しだいに嫌われ者となっていく。戦時中には、

「日本を兵糧攻めするために、アメリカ軍がザリガニを空中からばらまいたに違いない!」などという根も葉もない噂までもが飛び交った。

果たして、駆除が始まったのであった。ハサミを振り上げての抵抗もむなしばかりであった。

二〇一〇年には絶滅?

しかし、彼らに真に深刻な打撃を与えたのは、駆除ではなく、農薬や産業開発による環境汚染であった。結果、昭和二五(一九五〇)年頃

思うこと屢々。(一面から続く)

それに対して、人間は言葉という道具を持つつという幸福に恵まれた存在だ。人間同士なら、ましてや、日本人同士であるならば、日本語という道具で、それ相応の相互理解が可能だ。ありがたや、ありがたや。もちろん、寸分違わぬ十全の理解など素より望むべきものなきことであることは自明。不完全でもないよりはまし、というより、不完全なのだからお互いに理性と想像力で補完し合いながら意志の疎通を計れば良い。こんなところが、私の言語観。言語に対する期待と諦念。
しかし、時代が変わったせいなのか、近頃の日本語は私の理解を遙かに遙かに遙かに超越した謎の変化を遂げているようである。実のところ、近頃の日本語状況を考えると、

まで増え続けていたその数は、昭和三五(一九六〇)年ごろから減少し始める。やがて昭和四五(一九七〇)年ごろには、水田から彼らの姿はほとんど消え、水路や河川、ため池などで細々と生き延びるしかなくなってしまうのである。

一方で、日本に定着して半世紀以上が経過し、その棲み心地のよい環境に慣れきってしまったことも、個体数減少に拍車をかけているのではないかとされている。競争が少ないために、油断が生じたというわけだ。たとえば、エサの消化力、吸収力が弱まったためにカルシウムが不足し、甲殻が軟らかくなって他の動物のエサになりやすくなっているのではないかと、いった点が指摘されている。

このままいったら、二〇一〇年ごろまでには、アメリカザリガニは絶滅するのではないかとまで言う説もある。これもまた栄枯盛衰の習いなのか。古来日本人好みの。

些かの...いや、かなりの不安を感じずにはいられない。

私を悩ませるのは女子高生の崩れた言語感覚やネットから生まれた変てこりんな戯けた文化などではない。こともあろうに、一国の首相の発言なのだから手に負えない。日本が愚民によって選出された愚議員のさばる愚国家であるにしても、近頃のあれこればかりにも酷い。前述したように、私は言語の不完全さを認識しているし、だからこそ、わけのわからない発言でも、それなりに理解しようと思いを巡らせ悪戦苦闘する。けれども、どんなに脳細胞を総動員しようとも、私の中の日本語の範疇を大幅に逸脱している言語感覚の持ち主なのだ、あの小泉とかいう人は、ここで一つ一つを論うことはしないけれど、昨今の言動、完全に常軌を逸してはいないか。それに対して大して攻め立てても

bar&kitchen kanna

編集後記
からす新聞第六巻第五号(通巻第六五号)無事、発行できました。
新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。
次号発行予定日は二〇〇四年六月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

ファミマ

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451

ファミマ



Ken-ichi Shinozaki,
architect

Voice : +81-3-3220-0644
Facsimile : +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
篠崎健一アトリエ

(全木)